

# 日本語乳幼児向け絵本に見られる「場」志向性

成 岡 恵 子

キーワード: 「場」志向性、場の語用論、絵本、視点

## 1. はじめに

子ども向け絵本と、小説などほかの読み物との違いの1つは、絵本は子どもなどに向けて読み聞かせをする機会が多いことであろう。一人で心の中で読む場合と異なり、絵本を読み聞かせする際には、声色や口調を考えながら読む必要がある。誰の言葉なのか、どういう心情なのか、テキストや絵から推測しながら読み聞かせをするであろう。読み聞かせを聞いている子どもたちは、目から入る絵と、耳から入る言葉から、絵本のストーリーの世界に入っていく。そして、お気に入りの世界を知った子どもは、その絵本を何度も読みたがる。絵本翻訳者の灰島(2005:4)は、絵本とは繰り返し読まれることが多いため、それに耐えうる豊かな言語表現を使わなければならないと述べている。そうであれば、長い間多くの人々に親しまれてきた絵本のテキストには、その言語らしい「豊かな言語表現」がたくさん詰まっているのではないだろうか。

そのような考えから、英語と日本語の絵本のテキストにはどのような相違点があるかを探るため、成岡(2022)では日英語絵本の対照研究を行った。この研究では1冊の英語で書かれた絵本とその日本語翻訳を対象としたが、両言語の特徴が数多く見て取ることができた。最も明確な相違点は、ストーリーが誰の視点から語られているのか、という点であった。英語の絵本は、初めから終わりまで一貫して、ナレーターが客観的な視点からス

トリーを語っていた。それに対し、日本語に翻訳された絵本は、ナレーターの視点から語られる時もあるが、登場人物の視点から語られる場面もあり、特にストーリーが展開する後半は、登場人物の視点から語られる場面がほとんどであった。そのような絵本の特徴を、場の理論を用いて考察した。

本稿は、日本語で書かれた乳幼児向け絵本を複数分析することで、ストーリーがどのように語られているのかについて、さらに詳しい分析を行う。絵本とは比較的単純なストーリーが多いが、そのストーリーがナレーターだけでなく登場人物など、さまざまな視点を取りながら進んでいくこと、さらには登場人物だけでなく、ナレーターが場の中に入り込み、時には読者もストーリーに引き込むようにストーリーが語られていく様子を示していく。そして、そのような絵本の語りの特徴が、これまで「場の語用論」で論じられている、日本語の「場」志向性に如何に関わるかを明らかにしていく。

絵本とは文字通り、テキストと絵の融合によって意味が生じるメディアである。本稿ではテキストの示す視点だけでなく、絵の中の視点にも注目し、マルチモーダルな分析 (van Leeuwen 2004) を試みる。そして、絵本のストーリーの「場」を構成する要素として、描かれた絵が大きな役割を担うことを示す。

本稿のデータとして選んだ3作品は、多くの人々により長年親しまれている、乳幼児が対象の絵本である。分析する作品を選ぶ際には、繰り返しが主になっている絵本や、語彙を紹介するような絵本ではなく、ストーリー性のある作品を選んだ。これまでの言語学の研究に多く見られるような文のレベルの分析に留まらず、絵本全体を通して見ることにより、どのような視点からストーリーが展開しているのかを示す。そして、多くの人に長く読まれている絵本に見られる、日本語らしいストーリーの語られ方を明らかにしていく。

## 2. 日本語の「場」志向性

藤井(2020)では、日本語は物事を「場」を中心として捉えるような「場」志向性を持つため、何か言葉を発する際に自己を場の状況や事態から切り離さずに表現すること、そして主体は明示されずに述語中心の言語使用が特徴であることを、さまざまな例を挙げて論じている。本稿で扱う日本語の乳幼児向け絵本においても、ストーリーの中で誰が主体であるかはテキストにはほとんど明示されず、登場人物やナレーターが場の内側から代わる代わる状況や感情を言語化し、ストーリーが展開していくという特徴が見て取れた。さらには、そのストーリーを読んだり聞いたりする読者の視点までも、ストーリーの場に引き込むような語り方になっていた。このような日本語の絵本の特徴を説明するため、「場の語用論」における「場」志向性という考えを用いて分析していく。

英語などの欧米の言語や文化を基に作られた既存の言語学・語用論では、話者が事柄を外からの視点でとらえて言語化する。それに対し、「場の語用論」では、話し手や聞き手、そしてそれだけでなく、その場の状況など、さまざまなものを一要素として場の内側からとらえて言語化する。井出(2022:34)は「まず、場があって、その中にさまざまな要素が相互依存して存在している。その内側から湧き上がって発話がなされる」と説明している。そのような場の中では、話し手と聞き手やほかの要素がはっきりと分かれているものではなく、自他非分離的、融合的な存在になるのである。

例えば、新幹線のアナウンスが、英語では“*We are arriving at Tokyo station.*”と言う場合、日本語では「まもなく東京です。」となる(岡 2022)。英語では誰が東京に近づいているのかを明示するが、日本語では「今この場」に主体があると捉える。そして、その場が「近づく」という事態に関わっているという見方をしているために、「まもなく東京です」という表現がふさわしいのである。具体的な主体や客体がなく、乗客や乗員、新幹線そのものも含め、その場の物事すべてが東京という場になる、ということが言語化されるのである(岡 2022:70)。

また、感情や感覚をどのように表現するかについても、場の語用論から考えることで日本語の特徴が理解できる。日本語では普通、「私は寒い」などと主体を明示することはせず、「寒いね」と述べる方が自然である。それはその場において寒いのは、話者だけではなく、聞き手などその場にいる者に共有されている体験として表現されているためである(岡 2022:77-78)。また、見える、聞こえる、といった感覚の表現についても、英語では“I can see a lightning.”や“I can hear a thunder.”となるが、日本語では「稲妻が見える。」や「雷鳴が聞こえる。」と主体を言語化せずに表現する。日本語では見たり、聞いたりする「私」を「主体」と捉えるよりも、見える、聞こえるような「場」にいること、そこに関わっていることを言語化しているのである(岡 2022:74)。

このように、物事を「場」を中心として捉え、「今ここの場」に主体があるという考え方、そして話者や聞き手など、その場にいる要素を融合的な存在とする考え方により、日本語の絵本3作品を分析していく。

### 3. 『たんじょうび おめでとう』

本節では、『たんじょうび おめでとう』(1977年、森比左志・わだよしおみ作、若山憲絵、こぐま社)をデータとして扱う。この本はこぐま社の出版する「こぐまちゃんえほん」シリーズの1冊であり、こぐま社によると、対象年齢の目安は0歳から3歳ごろまで、となっている。2022年5月の時点で第116刷発行となっている。「こぐまちゃん」が3歳の誕生日を迎える日に、出来るようになったことや好きなことを紹介し、友だちの「しろくまちゃん」を招待して誕生日のお祝いをする様子が描かれている。登場人物は主人公の「こぐまちゃん」のほかに、友だちの「しろくまちゃん」、そしてこぐまちゃんのお母さんとお父さんの4人である。各ページに絵があり、絵の下にテキストが書かれているが、14-15、18-19、20-21、22-23ページは、見開き2ページに渡って1つの絵が描かれている。表1は『たんじょうび おめでとう』のテキスト全文を載せたものである。

表1. 『たんじょうび おめでとう』のテキスト全文

ページ	テキスト
1	1. きょうは こぐまちゃんの たんじょうび
2	2. ほく 3さいに なったんだよ 3. こぐまちゃんは ひとりで おきます
3	4. はみがきも ちゃんと します 5. かおも ちゃんと あらいます
4	6. ふくも ひとりで きかえます 7. ほく なんでも できるよ
5	8. だけど ぼたんを かけるのは むずかしいよ 9. おかあさんに かけて もらうんだ
6	10. あさごはんです 11. すこし こぼすけど すぷーんも つかえます
7	12. たべたら かたづけます 13. おさらも こっぶも すぷーんも
8	14. こぐまちゃんは えを かくのが だいすきです 15. これ ばば
9	16. すなあそびも すきです 17. おやまを つくったり とんねるを ほったり
10	18. しろくまちゃんと いっしょに こうえんに いきます
11	19. きょうは ほくの たんじょうび 20. ほく 3さいに なったんだ
12	21. たかい てつぼう できるかな ぼん
13	22. だすん こぐまちゃんは くやしそう
14	23. とびいし ぴょんぴょん 24. ほくの たんじょうび しろくまちゃんも きてね
15	25. ええ いくわ 26. わたしの たんじょうびも もうすぐよ
16	27. たんじょうびの けーき おかあさんが つくりました 28. おおきいなあ
17	29. はい たんじょうびの おれぜんと 30. なにかしら
18	31. たんじょうびの おいおい 32. しろくまちゃんも きました

19	33. ろうそくに ひを とします 34. おめでとう おめでとう ありがとう
20-21	35. さあ ぶれぜんと あけましょう
22-23	(絵のみ)

テキスト全体を見ると、ナレーターの視点からストーリーが述べられている部分と、登場人物の視点から述べられている部分がある。また、誰の視点なのか明確でない部分もある。本作品は、次節以降に見る2作品に比べ、誰の視点から発せられているのかが、テキストのみから読み取ることが可能な部分が多い。例えば、ナレーターの視点は「こぐまちゃんは ひとりで おきます」(3行目)のように、こぐまちゃんを三人称表現を使用して言い表し、語尾は「です・ます体」を用いることが多い。それに対し、登場人物である「こぐまちゃん」の視点は「ぼく 3さいに なったんだ」(20行目)などのように「ぼく」という一人称代名詞と「だ・である体」の使用が見られる。「しろくまちゃん」は「わたしの たんじょうびも もう すぐよ」(26行目)や「ええ いくわ」(25行目)など「わたし」という一人称代名詞と、女性的な表現が使用されている。

本作品は場面ごとにナレーターが場面設定や導入をし、その後こぐまちゃんとナレーターが掛け合いをする場面や、こぐまちゃんとほかの登場人物がやり取りをする場面がある。以下に、1) ナレーターと登場人物の掛け合いの部分、2) 登場人物同士の掛け合いの部分、3) 誰が述べているのかがあいまいな表現、に注目した分析をする。

### 3.1. ナレーターと登場人物の掛け合い

作品の最初の場面は、3歳になったこぐまちゃんが出来るようになったことや好きなことを、ナレーターとこぐまちゃんの掛け合いのような形で紹介されている。はじめに「きょうは こぐまちゃんの たんじょうび」(1行目)とナレーターが導入し、「ぼく 3さいに なったんだよ」(2行

目)とナレーターの発話に補足するように、こぐまちゃんの視点から述べられている。その後、ナレーターの視点から「こぐまちゃんは ひとりで おきます」(3行目)や「ふくも ひとりで きかえます」(6行目)とこぐまちゃんが出来たことを述べている。その途中で、こぐまちゃんがナレーターの伝えたことをまとめるように、「ほく なんでも できるよ」(7行目)と言っている。そして、なんでもできると言ったページの絵は、服を着ようとして転びそうになっているこぐまちゃんの様子が描かれている(図1)。さらにその後、「だけど ほたんを かけるのは むずかしいよ」(8行目)「おかあさんに かけて もらうんだ」(9行目)、と自分では出来ないことを述べている。テキストと絵のミスマッチや、掛け合いの中でユーモアが見られる。このように、本作品では多くの場面でナレーターと登場人物が掛け合いながら、ストーリーが展開している。それはまるで親子で誰かに対して話をしているように、ナレーターと登場人物が同じ場を共有しながら、共にストーリーを進めていくようなテキストになっている。

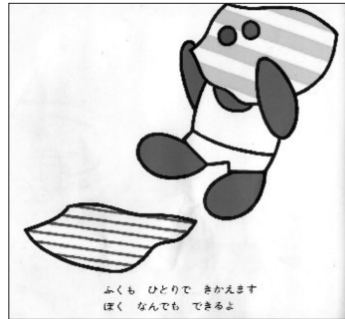


図1 『たんじょうび おめでとう』  
4ページの絵

### 3.2. 登場人物同士のやり取り

10～15ページは、こぐまちゃんがしろくまちゃんと一緒に公園で遊ぶ場面となる。その部分でも、ナレーターが場面設定をするように、「しろくまちゃんと いっしょに こうえんに いきます」(18行目)と「です・ます体」で導入をしている。そこから、こぐまちゃんとしろくまちゃんの会話のようなやり取りが見られる。本稿で扱う3作品に共通することであるが、登場人物同士のやり取りの部分において、鍵括弧や「と〇〇が言った」など、誰の発話なのかを明示する引用表現は使われていない。「ほくのたんじょうび しろくまちゃんも きてね」(24行目)、「ええ いくわ」

(25行目)、「わたしの たんじょうびも もうすぐよ」(26行目)と登場人物のやり取りとなっているものの、誰の言った言葉かは明示されていない。先に述べたように、人称表現や語尾表現で誰の視点から発せられたものなのかが暗示されており、またそのページに描かれているのはこぐまちゃんとしろくまちゃんのみであるために、読み手は誰の発話として読めばいいのかが分かる。しかし、それがテキストには言語化されていないのである。

Fukada (2016:227) は、ある英語絵本の日本語翻訳本の分析の中で、「『どうかしたの?』しろうさぎがききました。」などのように、「と」や「って」のような引用標識 (quotative marker) を使わずに直接話法が使用されていることに注目し、引用標識の非使用により、読み手が容易に物語の世界に入り込むことができると述べている。本稿で見た作品では、引用標識「と」や「って」のみでなく、直接話法を示す鍵括弧(「」)や、引用標識に続く表現(「〇〇が言った」など)も使用されていない。このことにより、さらに読み手がストーリーの世界に入り込むことが容易になり、読者も登場人物と場を共有することができると考えられる。

### 3.3. 誰が述べているのかあいまいな表現

16ページからは誕生日のお祝いの準備をし、お祝いをする場面であり、はじめは「たんじょうびの ケーキ おかあさんが つくりました」(27行目)とナレーターの視点からの導入となる。この場面では、思ったことや感じたことが表現されていたが、それらの主体が誰なのかがあいまいな表現がいくつか見られた。

16ページの「おおきなあ」(28行目)は、おかあさんがケーキを作っている場面で、おかあさんの隣にいるこぐまちゃんがケーキを見ている場面である。こぐまちゃんが目の前のケーキを見て、「おおきなあ」と言っていると考えられるが、場の中で一緒にケーキを見ているナレーターが感情を表現しているとも取ることができる。さらに、こぐまちゃんの顔ほどの大きさのケーキの絵を見た読み手も、一緒に「おおきなあ」と言いた

くなるような場面であるから、読者の視点も引き込んでの表現とも捉えることができる。

大きなプレゼントの箱をお父さんにもらっている場面で「なにかしら」(30行目)という表現が出てくるが、プレゼントの中身が気になるのはこぐまちゃんだけではない。その場にいるナレーターもそうであろう。この場面は図2のようにこぐまちゃんとお父さんしか描かれておらず、こぐまちゃんの発話であれば「なんだろう」となりそのようなものの、「なにかしら」となっている。ナレーターが場の中に入り込み、プレゼントの中身が気になっている様子を発したとも捉えられる。ケーキに対する「おおきいなあ」と同様、絵本の読者も同じように、箱の中身は何かと楽しみにする様子が「なにかしら」によって表現されているとも考えられる。



図2 『たんじょうび おめでとう』  
17ページの絵

20-21ページは、リボンがかけられたカラフルなプレゼントの箱が見開き2ページに大きく描かれているが、そのページは「さあ おれぜんとあけましょう」(35行目)というテキストになっている。「です・ます体」が使用されているため、ナレーターの視点からの発話と考えることもできるが、ナレーターだけでなく、プレゼントをもらったこぐまちゃん、そしてその場にいる皆がプレゼントの中身が気になり、中を見ることを心待ちにしている様子が、この表現から伝わってくる。また、前の2つの表現同様に、絵本の読者もその場に引き込んでいる。

これらの表現は、主体が明示されておらず、また、鍵括弧や引用表現も使用されていないことで、その場から湧き上がる表現として言語化されているようである。そのために、ナレーターと登場人物、さらには読者までも含めて、同じ場を共に体験しているものの声と捉えることが可能となっ

ている。

34行目の「おめでとう おめでとう ありがとう」という表現にも注目したい(18-19 ページ、図3)。ここでは「おめでとう」を2回繰り返しているが、これは複数の登場人物がこぐまちゃんに「おめでとう」と伝えている様子を表していると思われる。このように複数の声を繰り返して表現する方法が、日本語の絵本ではしばしば見られる。次に見る『かばくん』の最後も「さよなら さよなら」と2回繰り返しているが、その場にいる二人の登場人物それぞれの声を表現している。誰の視点から述べられているのかが明確にされておらず、また鍵括弧や引用表現を使用せずに、その場にいる者の声として表現されている。主体を明示せずに繰り返すことで、ナレーターと登場人物、登場人物同士、さらには登場人物と読者など、さまざまな解釈が可能となり、読者をストーリーの場に引き込む効果があると考えられる。

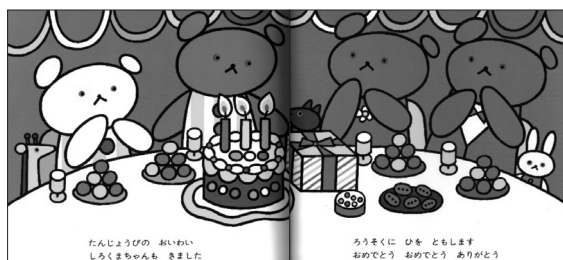


図3 『たんじょうび おめでとう』18-19 ページの絵

以上、『たんじょうび おめでとう』が誰の視点から語られているのか、という点に注目した分析をした。場面の導入時こそ、ナレーターの視点から述べられているような規則性は見られたが、一貫してナレーターの視点からストーリーが語られるのではなく、ナレーターや登場人物といった、さまざまな視点から語られていた。その視点の変化により、その場にいる者が言葉を掛け合いながらストーリーを進めているようであった。また、「なにかしら」など、場の中にいる誰でもが発しそうな表現が使われる場面も見られ、ナレーターやある一人の登場人物ではなく、皆が体験している「場」が中心となり、ストーリーが進んでいることが見て取れた。さらに、場を中心としてストーリーが進むことで、本の読者までもストーリーの場

に引き込むような効果があることを見た。

#### 4. 『かばくん』

本節では、『かばくん』（岸田衿子作、中谷千代子絵）の分析を行う。この絵本は1962年に『月刊こどものとも』として出版され、その後、1966年に1冊の絵本として出版されている。2022年4月に第135刷が発行されている。裏表紙には「読んであげるなら3歳から」「自分で読むなら小学校初級むき」と書かれている。見開き2ページで1つの絵となっており、テキストはページによって配置されているところが異なるが、絵の中に書かれている。動物園でのかばの一日が描かれており、登場人物は、「かばくん」と「かばのこ」、かばのお世話をする男の子、その男の子と一緒にいる「かめくん」、そして動物園のかばを見に来た子どもたちである。それにナレーターの声加わり、さまざまな視点から、動物園でのかばの一日が描かれている。

前節で見た作品と同様、誰が言ったことなのか、誰が思ったことなのかは一切明示されておらず、また登場人物の視点から述べられている部分であっても、鍵括弧や引用表現（「と〇〇が言った」など）は使われていない。また前節の作品で見られた「です・ます体」と「だ・である体」などの使い分けは見られない。その代わりに本作品は、絵がさまざまなアングルから描かれており、その描かれ方を糸口にして、誰の視点から発せられているのかを想像することができる。場を構成する要素として絵が重要な役割を担っており、絵を含めたその場の中にいる者の視点からストーリーが進められている様子を示していく。表2は『かばくん』のテキスト全文、および絵のアングルから読み取れる視点を記した。表2から明らかのように、本作品はページをめくるごとに絵のアングルが変化し、それに伴いテキストが誰の視点から発せられているのかも、次々に変化している。以下に1) ナレーターの視点、2) 男の子の視点、3) かばくんとかめくんの視点、の三つに注目した分析をする。

表 2. 『かばくん』のテキスト全文および絵から示される視点

ページ	テキスト	視点
2-3	1. どうぶつえんに あさが きた 2. いちばん はやおきは だーれ 3. いちばん ねぼすけは だーれ	ナレーター
4-5	4. おきてくれ かばくん 5. どうぶつえんは もう 11 じ 6. ねむいなら ねむいと いってくれ 7. つまらないから おきてくれ	男の子、(かめくん)
6-7	8. や かめくん 9. や かばくん	かばくん、かめくん
8-9	10. かばより ちいさい かばのこ 11. かばのこより ちいさい かめのこ 12. かめより ちいさいもの なんだ？ 13. あぶく……	ナレーター
10-11	14. かめくん 15. きょうは なんようび？ 16. きょうは にちようび 17. あ そうか 18. なんだか うるさいと おもった	かばくん、かめくん
12-13	19. きた きた きた きた 20. きた きた きた きた 21. くつした はいてる 22. すかーと はいてる 23. はんずぼん はいてる 24. げたの こも いる	かめくん、かばくん、 かばのこ
14-15	25. だら ちよっと みてこよう 26. ぞろ ぞろ ぞろ ぞろ 27. わい わい わい わい	かばくん、子どもたち
16-17	28. かばだ かばだ かばだ 29. うわっ うわっ 30. ちびの かばだ 31. あれっ かめのこだ	子どもたち

18-19	32. たべてくれ かばくん 33. あおい きゃべつに とうもろこし 34. きらいなら きらいと いってくれ 35. すきなら はやく たべてくれ	男の子
20-21	36. うわっ 37. たべちゃった	かめくん
22-23	38. もう おなか いっぱいなんだな 39. うん おなか いっぱいなんだ	かめくん、かばくん
24-25	40. さよなら 41. さよなら 42. また くるよ 43. うん	かめくん、かばくん
26-27	44. おやすみ かばくん 45. どうぶつえんに よるがきた 46. こっそり ゆめみて ねむってくれ 47. おやすみ かばくん 48. ちびの かばくん	ナレーター

#### 4.1. ナレーターの視点

初じめのページ(2-3ページ)は動物園を広い視点から見た絵となっており(図4)「どうぶつえんに あさが きた」(1行目)と場面の導入をしている。朝、動物園に足を踏み入れたナレーターが語っているようである。かばのお世話をする男の子が餌が入ったかごを持ち、かめを連れて歩いて

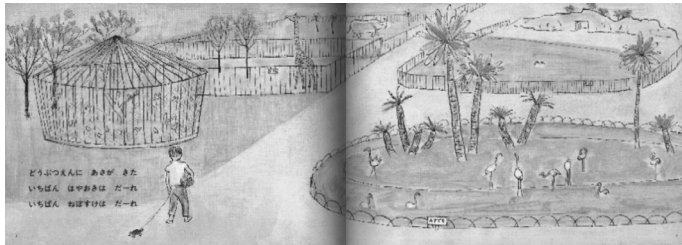


図4 『かばくん』2-3ページの絵

いる後ろ姿が描かれており、これから一日が始まることが暗示されている。また、最後のページ(26-27 ページ)も動物園全体の絵になっている。こちらは背景全体が濃い青で塗られ、夜の動物園が描かれている。このように、ストーリーのはじめと終わりの部分が、明らかなナレーターの視点となっている。そしてそれは動物園全体を描く絵に加え、「どうぶつえんに あさがきた」(1行目)や「どうぶつえんに よるがきた」(45行目)と一日の中での時を示すテキストと共に示されている。「あさがきた」や「よるがきた」という移動表現自体も動物園の中にいる視点から述べられていることが分かるが、その直後には、「いちばん はやおきは だーれ」(2行目)「いちばん ねほすけは だーれ」(3行目)や、「おやすみ かばくん」(44、47行目)「ちびの かばくん」(48行目)と、動物たちに声を掛ける表現が使われており、やはりナレーターの視点が場の内側にあることが分かる。

#### 4.2. 男の子の視点

かばのお世話をする男の子からの視点は、4-5 ページおよび18-19 ページに見られる。4-5 ページには「おきてくれ かばくん」(4行目)は、男の子の口が開いている絵が描かれているため、男の子から目をつぶっているかばくんへの発話として捉えることができる(図5)。本作品では言葉の語尾で登場人物やナレーターを見分けることはできないが、男の子の発話と思われる部分のみ、「ねむいなら ねむいと いってくれ」(6行目)のように「〜てくれ」という語尾が繰り返し使われていた。このページのテキストがすべて男の子の発話とも取れるが、図5を見ると、男の子の連れているかめくんも頭を上げ、かばくんたちのほうを見ているため、「つまらないから おきてくれ」(7行目)などは、かばくんと早く遊びたいかめくんの視点から述べられているとも読み取ることができる。さらに、主人公のかばくんがいつまでも寝ていたらつまらないよ、という読み手の視点も引き入れた解釈が可能である。このように、読み手の視点までストーリーに入れることができるのは、先に述べたように、鍵括弧や引用表現がなく、

誰の発話なのか、主体が明示化されないテキストのためであり、場を中心としたストーリー展開のためである。

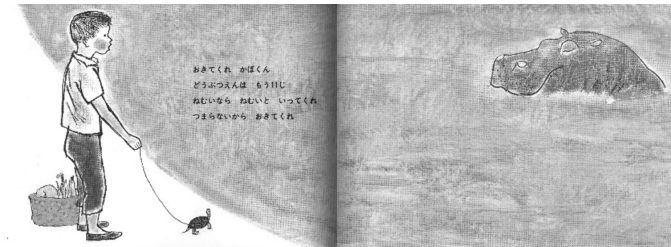


図5 『かばくん』 4-5 ページの絵

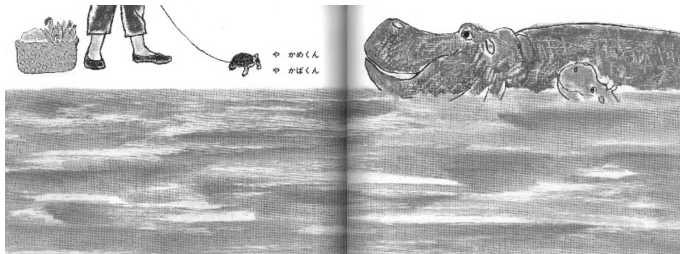


図6 『かばくん』 6-7 ページの絵

#### 4.3. かばくんとかめくんの視点

男の子の視点から表現されたページ (4-5 ページ、図5) から次のページ (6-7 ページ、図6) に行くと、絵のアンゲルが下がり、男の子は足元のみが描かれている。そして、水の中のかばくんの目と、地面にいるかめくんの目があった様子が描かれている。図5と図6を見比べると分かるように、同じ「場所」の絵であるが、異なるアンゲルから描かれることで、視点が男の子からかばくんとかめくんに移ったことが分かる。藤本 (1999:128) は、絵本では、めくるという動作と視点を巧みに動かすことによって、読者を楽しませることができ、さらに絵のアンゲルを変化させ読者の視点を移動させることによって、臨場感を持たせることもできることを指摘している。『かばくん』では、ページをめくるごとに視点が変化しており、その変化がテキストのみからでは分かりにくい、描かれた絵のアンゲルによ

て補われている。6-7 ページ (図6) における「や かめくん」(8 行目)「やかばくん」(9 行目) というやり取りは、誰の発話であるかテキストには明示されていないが、絵を見ることでかばくんとかめくんのやり取りと考えることができる。同様に、24-25 ページの「さよなら」「さよなら」「またくるね」「うん」(40～43 行目、図7) というやり取りのある場面も、男の子は足元だけ描かれているため、かばくんとかめくんのやり取りと解釈することができる。前沢 (1999) は絵本では、絵とテキストが補完しあい作品が出来上がるため、片方だけでは作者の意図が十分に伝わらない場合があることを指摘している。まさに、この場面では、かばくんとかめくんが向かい合っている絵、さらに人間の男の子は足元のみが描かれている絵があるからこそ、言葉のやり取りが、かばくんとかめくんの間のものと理解することができるのである。絵本というジャンルは、書きことばではあるが、テキストだけでなく、絵という要素も場の設定に加わることで、高いレベルでの場面設定が可能となることが見て取れる。

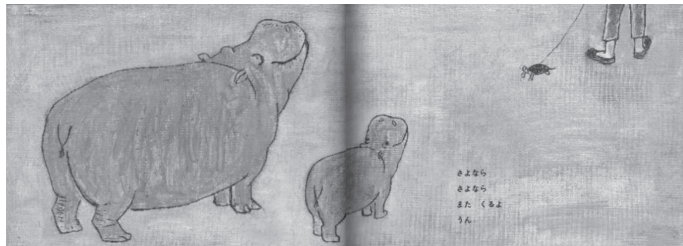


図7 『かばくん』 24-25 ページの絵

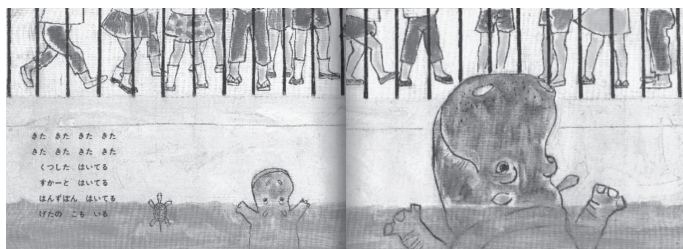


図8 『かばくん』 12-13 ページの絵

別の場面のかめくんとかばくんの視点として、12-13 ページ (図 8) を見てみたい。このページでは、かめくん、かばのこ、かばくんの三者が水の中に並び、そのちょうど上にいる子どもたちを見ている構図となっている。かばを見に来た子どもたちは、下半身のみが描かれている。テキストにはどの登場人物がどの発話をしたのか、明示はされていないが、「きた きた きた きた」(19 行目および 20 行目) という繰り返し表現によって、その場にいる三者が言っている様子が表現されている。それは、前節で見た「おめでとう おめでとう」の繰り返しと同様、同じ表現を繰り返すことで、その場にいる者の複数の声を表現している。それ以降の「くつした はいてる」(21 行目)「すかーと はいてる」(22 行目)なども、誰が言ったことなのかは明示されていないが、三者の誰かがそれぞれ述べたことと考えられる。これらの表現も、場が中心となり、その場において相互依存している要素(ここでは登場人物)から、湧き上がる声として表現されていると考えることができるのである。

さらに、12-13 ページで見られる側であった子どもたちは、16-17 ページでは、アングルが変わり、見る側となる。子どもたちの視点からかばくんたちを見て、「かばだ かばだ かばだ」(28 行目)というテキストになっている。このように、次々と視点が変わるようなストーリー展開や、場の中で湧き上がるような同じ表現の繰り返しが本作品の特徴として挙げられる。

以上『かばくん』では、ページをめくるとに絵が異なるアングルで描かれ、そのアングルの変化に伴い、テキストも誰の視点から書かれているかが変化していることを見た。視点がページごとに変わっていく様子は即興劇のようである。場に内在する視点によって事象を捉え、場面によって視点が瞬時に変わり続ける動的モデルを「即興劇モデル」とし、それが「場の語用論」の前提とされているが(井出 2020:17)、まさにこの作品がそうである。場所的自己でつながっているストーリーの場の中にいる者が、場面によって視点を移動させながら、ことばを発している。そのときに、わ

わざわざ誰が主体なのか、誰の発話であるのかを明示する必要はない。さらに「劇場では観客も場所的自己でつながっている」(井出 2020:17) ために、絵本のストーリーの場に引き込まれている読者も同調することができるのである。

5. 『14 ひきのびくにつく』

本節では、『14 ひきのびくにつく』(1986 年、いわむらかずお作、童心社)を分析する。この作品は、14 匹のねずみの家族の日常を描いた「14 ひきシリーズ」のうちの 1 冊である。2022 年 3 月に第 103 刷が発行されている。童心社によると対象年齢は 3 歳からとなっている。主な登場人物は、10 匹のねずみの子どもと、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんの 14 匹家族であり、自然の中に住むねずみたち一家の詳細な絵が特徴的な絵本である。見開き 2 ページで一つの絵となっており、各ページの絵の下に 1.5 センチほどの余白があり、その部分にテキストが書かれている。本作品は春の天気の良い日に一家でピクニックの準備をし、野原へ出かける様子が描かれている。表 3 は本作品のテキストの全文を載せたものである<sup>1</sup>。

表 3. 『14 ひきのびくにつく』のテキスト全文

ページ	テキスト
2-3	1. きょうは、なんて いい てんき。
	2. みんなで、はるの のはらへ でかけよう。
4-5	3. おにぎり もって、すいとう もって、うれしいな、びくにつく。
	4. あれ、とっくん、おてて どこ いった？
6-7	5. はるの ひかりが あふれてる。
	6. ぴーぴー ないてるよ。
	7. えながの あかちゃん、うまれたね。
8-9	8. ぜんまいが、むっくり かお だした。
	9. あまがえるも めを さます、くえっ くえっ。
	10. はるだね。

10-11	<p>11. ほら みて! くんちゃん、すみれの はな みつけた。</p> <p>12. やまぶき、ちごゆり、ふでりんどう。</p> <p>13. もりは はなざかり。</p>
12-13	<p>14. のはらに でたよ。</p> <p>15. ひろいな。</p> <p>16. そらが、どこまでも つづいているね。</p> <p>17. ごうくん はっくん、なにが みえる?</p>
14-15	<p>18. ほっ ほっ ほーい、のはらを はしろ。</p> <p>19. はるの かぜ、はるの におい。</p>
16-17	<p>20. のっそり のっそり ひきがえる。</p> <p>21. あたしゃ、もりへ かえって もう ひとねむり。</p> <p>22. わあ、よっちゃん、りぼん いいな。</p>
18-19	<p>23. あっ、これ なあに?</p> <p>24. かえるの たまごだよ。</p> <p>25. さっきの ひきがえるの あかちゃんかな?</p>
20-21	<p>26. いっくんの ふえ、ピーポ ピッ ピッ。</p> <p>27. みんな ならんで、つくしんぼの みち、タッ タッ。</p>
22-23	<p>28. とのさまがえるが、おがわを ぴょーんと とびこえた。</p> <p>29. にっくん、ごうくん、まけずに ぴょーん。</p> <p>30. そーら、はっくん。</p> <p>31. あっ、ろっくん も…</p>
24-25	<p>32. じゃぼーん!</p>
26-27	<p>33. ふわふわ わたげ、どこ いくの?</p> <p>34. あおい そらに たんぼぼの たね、まきに いくの?</p>
28-29	<p>35. ああ、おなかが すいた。</p> <p>36. たんぼぼのはらで おべんとう。</p> <p>37. おいしいな。</p> <p>38. ごうくん ゴクン、つめたい みず。</p>
30-31	<p>39. おべんとう たべたら、のはらで あそぼ。</p> <p>40. きょうは ほんとに いい てんき。</p>

本作品では、ねずみの家族の様子や自然を描写するナレーターの声を中心となっているが、客観的な視点から眺めて語られてはいかなかった。ストーリーの場に入り込み、ねずみたちと一緒に、見たり、聞いたり、感じたりと体験しながら、場の中で、ナレーターの視点が登場人物の視点と融合した状態でストーリーが進んでいく様子が見て取れた。これまで見てきた2作品と同じように、登場人物の発話と思われるテキストであっても、鍵括弧や引用表現が使われておらず、ナレーターを含め、場の中にいる者全員の視点からストーリーが語られているようであった。ナレーターの視点が、登場人物の視点と融合しつつ、ストーリーを進めていく様子を、1) 感情や感覚を表す表現、2) 登場人物を名前呼びかける表現、に注目して分析する。

### 5.1. 感情や感覚を表す表現

本作品では、ナレーターが場の中で体感したことを述べたり、登場人物の視点と融合して感じたことを述べる場面が数多く見られた。初めのページ(2-3 ページ)は、ねずみたちの家のある大きな木の根元を、上からのアングルで描いた絵の場面である(図9)。そこには「きょうは、なんて いい てんき。」(1行目)と、場面設定をするナレーターの声と取ることができるテキストがある。さらに、最後のページ(30-31 ページ)も「きょうはほんとに いい てんき。」(40行目)と締めくくっている。このように、初めと終わりに「いいてんき」という「今ここ」で感じたことを表現している。図9から分かるように、場面を上からの視点で描かれているが、テキストからは、場に内在するナレーターの視点が見て取れた。

「今ここ」の場に内在するナレーターの視点は、さまざまな場面で表れる。「のはらに でたよ。」(14行目)「ひろいな。」(15行目)は、登場人物たちが広い野原や空を見ている姿を後ろから描いている絵となる(図10)。野原に出たのはねずみたち登場人物であるが、ナレーターも一緒にその場にいるようなテキストとなっている。また、絵の中の同じ景色を見ている

読者たちも、その視点に融合して同じように感動することができるだろう。そのほかにも、「はるの ひかりが あふれてる。」(5行目)や「はるのかぜ、はるの におい。」(19行目)など、場の中で光や風を感じ、においを感じたからこそ言える表現が使われている。



図9 『14 ひきのびくにつく』2-3ページの絵

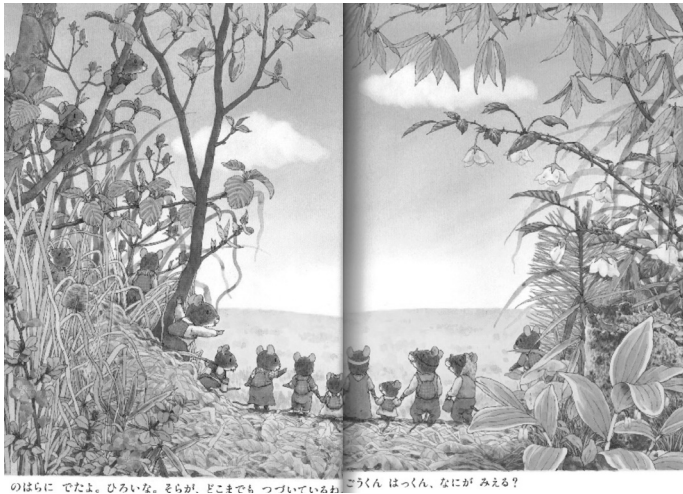
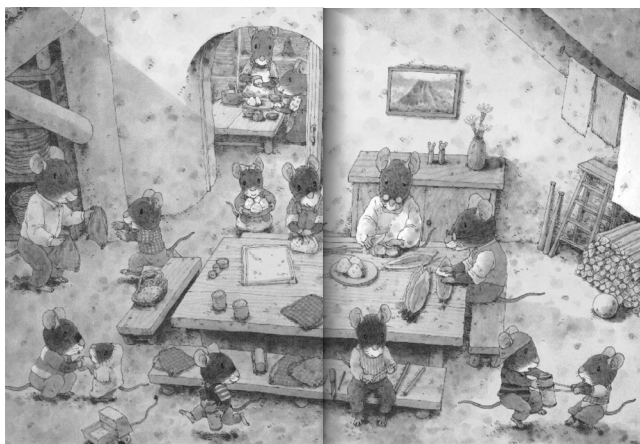


図10 『14 ひきのびくにつく』12-13ページの絵

4-5 ページでは、14 匹すべてが同じ場でさまざまなことをしていることが描かれており（図 11）、その場についてナレーターが「おにぎりもって、すいとうもって、うれしいな、ぴくにつく。」（3 行目）と述べている。それは読み聞かせをしている読者が、「おにぎりを作っている子もいるね、水筒で遊んでいる子もいるね」などと、絵を見ながら紹介しているようである。そしてさらに、「うれしいな、ぴくにつく」と登場人物たちの気持ちを表現する言葉が続いている。このように、初めはナレーターがそれぞれの登場人物がしていることに注目して述べ、次にその場にいる皆の感情を表現している。誰か特定の話者に視点があるのではなく、「場」の中に視点があると考えることで、このようなテキストの解釈が可能となる。



おにぎり もって、すいとう もって、うれしいな、ぴくにつく。あれ、とっくん、おでて どこ いった？

図 11 『14 ひきのぴくにつく』4-5 ページの絵

その他にも、28-29 ページの「ああ、おながが すいた。」（35 行目）や「おいしいな。」（37 行目）など、特定の人物ではなく、その場にいる皆が感じたことが表現されていたが、まさに場から湧き出るような声として言語化されていた。

## 5.2. 名前を呼びかける表現<sup>2</sup>

本作品の特徴として、登場人物の名前を呼びかける表現が使用されていることが挙げられる。4-5 ページの「あれ、とっくん、おてて どこいった？」(4 行目、図 11) のように登場人物の呼び名が用いられることで、読者が「とっくん」はどの子だろうかと探すように促される。登場人物の声として表現されていると捉えることもでき、またナレーターの視点が登場人物に融合して発せられていると考えることもできる。この呼びかけにより、「とっくん」とそのお世話をしている子に注目が行き、読者をストーリーに引き込む効果がある。12-13 ページの「ごうくん、はっくん、なにが みえる？」(17 行目) の部分は、名前を出すことによって、読者に木の上にいるねずみたち(図 10 右上)に注目を促している。同時に、下にいるねずみたちの中でも、おじいさんとおばあさん(図 10 右下の眼鏡をかけているねずみ)が木の上にいるねずみたちを見上げているように描かれているのだが、「なにが みえる？」と言っているのは誰だろうかと読者が絵の中で探しながらストーリーにより深く入っていくことが可能となる。

同じように、読者の注目を絵に向けるのが 2-3 ページの「みんなで、はるの のはらへ でかけよう。」(2 行目) という声掛けである。絵をよく見ると、お父さん(図 9 の右下あたり)が子どもたちに声をかけており、それに飛び上がって喜ぶ子どもたちの姿が描かれている。このように絵を見ながらテキストを読むことで、誰の視点から述べられているのか(ナレーターの視点が誰の視点に融合しているのか)を推測することができる。前節で見たような、絵のアングルから示される視点とは異なるが、ここでも、絵本のストーリーの場においては、絵も場の設定に深く関与していることが見て取れる。藤本(1999:48)が、絵本とはテキストのみがストーリーを語るのではなく、絵も語ること、さらにテキストには表現されない情報も絵が伝える場合があることを指摘している。本作品も、お父さんがピクニックを提案し、それに大喜びする子どもたちの絵によって、テキストで示される以上の情報を、絵が語っていると言える。

16-17 ページの「のっそり のっそり ひきがえる。」(20 行目)「あたしゃ、もりへ かえって もう ひとねむり。」(21 行目)の部分は、主な登場人物であるねずみたち以外の者からの発話が出てくる場面である。ナレーターの視点から「のっそり のっそり ひきがえる。」と述べることで、読者の注目を絵の中のかえるに向けている。そしてその直後に「あたしゃ」と一人称代名詞を用いて、ひきがえるの視点からの発話に移っている。このひきがえるはこの場面にしか登場しないが、そのような登場人物にも視点に移っている点は興味深い。つまり、ストーリーの場に一瞬でもいて場を共有しているものは、場の一要素となり得ること、そしてその登場人物の視点からでも、鍵括弧や引用表現を使わずに述べられていることが示されている。

以上、『14 ひきのぴくにつく』という作品の中で、如何にナレーターの視点が登場人物の視点に融合し、場の中からストーリーが語られているかを見てきた。場面全体を描く絵が用いられ、登場人物も多いストーリーであるが、それでもナレーターの客観的な視点から語られてはいなかった。ナレーターの視点がその場に入り込み、登場人物と同じように「うれしいな」や「おいしいな」など、登場人物と体験を共有し、場の中で融合した視点から感情を表現しながらストーリーが語られていた。日本語では「寒い」や「暑い」などの感覚だけではなく、「うれしい」などの感情も、場の中で共有できるものであり、主体（「私はうれしい」など）は明示せずに、自他非分離的な視点から言語化される（岡 2022:78）。今回見た絵本の中でも、ナレーターと登場人物が融合した視点から感情や感覚が表現されていたが、その際に主体だけでなく引用表現さえも明記されないことで、読者も自他非分離的な場の一要素になり、ストーリーの場に引き込むような語り方になっていた。

## 6. 絵本に見られる「場」志向性

3 作品の乳幼児向け絵本の分析から明らかになった共通点は、ナレーター

が場の中に入り込み、場の中からの視点で登場人物と共にストーリーを進めていた点であった。さらに、その場その場で異なる視点から語られ、誰か特定の登場人物の視点ではなく、場にいる皆が共有する感情など、場から湧き出るような発話も多く見られた。

場におけるナレーターの関わり方が、作品により少しずつ異なる点も興味深い。『たんじょうび おめでとう』では、ナレーターが場の中に入り込み、登場人物と同じように言葉を掛け合う様子が見て取れた。『かばくん』では、ナレーターが語る部分もあるが、視点が登場人物にある部分が多く、ストーリーの中で次々と視点が変わっていく様子が特徴的であった。ページをめくるごとに、即興劇のように場が移り変わり、場所的自己でつながる登場人物によってストーリーが進められていった。そして『14 ひきのびくにつく』では、ナレーターと登場人物の境目がなく、さまざまな登場人物と視点を融合させてストーリーが語られていた。感情や感覚を表す表現は、ナレーターと登場人物、そして読み手までもが共有する「場」から湧き上がるような声として表現されていた。このように作品によってナレーターが場にどのように関わるかが異なっていたが、日本語の絵本におけるストーリーの語られ方を理解するために、「場」を中心とした言語使用という捉え方が重要となることが明らかとなった。

## 7. おわりに

本稿では、長年日本の親子に親しまれてきた乳幼児対象の絵本を、「場」志向性という考え方をを用いて分析した。ナレーターが一貫して語るストーリーに慣れている英語話者が、本稿で見た作品に触れた場合、なんと分かりにくい絵本だろう、読みにくい絵本だろう、と感じるのではないだろうか。藤井 (2020:96-97) は、日本語と英語の特徴や違いは、対立するものでも、優劣を示すものでもなく、「日本語の考え方やことばのあり方も一つのあり方であることを意味する」と述べている。今回分析したような日本語の絵本が「一つのあり方」と理解されるために、そして英語話者から見

ると「分かりにくい」「読みにくい」という印象を与えてしまう可能性のある作品が、なぜ日本では好まれるのかを説明するためには、やはり日本語の「場」志向性が重要な概念となるであろう。

場の語用論が、「これまで疎遠だった言語研究と文学研究の橋渡しとなる可能性を秘めている」（井出 2022:55）ことを、絵本というジャンルの分析から少しでも示すことが出来たら幸いである。

#### 注

1 作品の中では見開き 2 ページ毎にテキストが 1 行で書かれているが、表に載せるにあたって文ごとに改行し、行番号を付けた。

2 本作品は、表紙と裏表紙の絵の中に、14 匹の登場人物が呼び名と共に描かれている。そのため、風貌や着ている服を手掛かりに、読み手は本文に登場する呼び名が絵の中でどのねずみのことなのか、見つけることができるような仕組みになっている。

#### 参考文献

藤井洋子 (2020) 「日本語の『場』志向性と述語主義を考える：英語との比較から」  
井出祥子・藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』 61–103. 東京：ひつじ書房。  
藤本朝巳 (1999) 『絵本はいかに描かれるのか (表現の秘密)』 東京：日本エディタースクール出版部。

Fukada, Chie (2016) The dynamic interplay between words and pictures in picture storybooks: How visual and verbal information interact and affect the readers' viewpoint and understanding. In: B. Dancygier, W. Lu, and A. Verhagen (eds.) *Viewpoint and the Fabric of Meaning: Form and Use of Viewpoint Tools Across Languages and Modalities*, 218–236. Berlin/Boston: Walter de Gruyter.

灰島かり (2005) 『絵本翻訳教室へようこそ』 東京：研究社。

井出祥子 (2020) 「場の語用論：西欧モデルを補完するパラダイム」 井出祥子・藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』 1–35. 東京：ひつじ書房。

井出祥子 (2022) 「場の言語学・語用論とその展開：言語と文化の関わりのメカニズムを求めて」 岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子 (編) 『場と言語・コミュニケーション』 31–60. 東京：ひつじ書房。

前沢明枝 (1999) 「語用論と絵本翻訳」 『情報文化論 3』 55–69. 情報文化研究会。

成岡恵子 (2022) 「英語と日本語の絵本の違いとその由来：場の理論からの考察」 岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子 (編) 『場と言語・コミュニケーション』 147–167. 東京：ひつじ書房。

岡智之 (2022) 「認知言語学から場の言語学へ：新しい言語学のパラダイムの展開」

岡智之・井出祥子・大塚正之・櫻井千佳子(編)『場と言語・コミュニケーション』  
61-96. 東京: ひつじ書房.

Van Leeuwen, Theo (2004) Ten reasons why linguists should pay attention to visual communication. In: P. LeVine and R. Scollon (eds.) *Discourse and Technology: Multimodal Discourse Analysis*, 7-19. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

絵本データ

いわむらかずお (1986) 『14 ひきのびくにつく』 東京: 童心社.

岸田衿子 (1966) 『かばくん』 中谷千代子 (絵) 東京: 福音館書店.

森比左志・わだよしおみ (1977) 『たんじょうび おめでとう』 若山憲 (絵) 東京: こぐま社.

